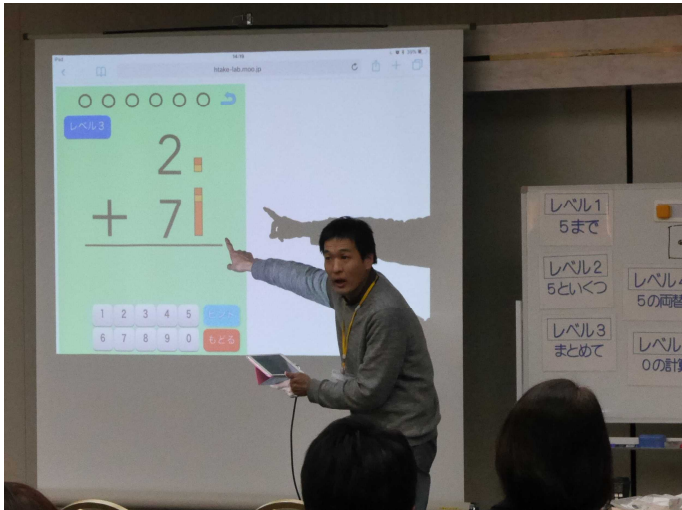


第6分科会

ゆっくり学ぶ子どもたちとの国語・算数の指導

坪郷 正徳氏 (狭山市立第七小学校通級指導担当)



毎日、子どもたちと向き合うことで生じる“悩み”、一緒に考えていこうという視点でお話いただいた。溢れる先生の笑顔、そして、熱意に会場全体が一体に・・・。「なんとなくわかるって？」その提案に心揺さぶられ、MIM（多層指導モデル）の2ndや3rdステージに属するゆっくり学ぶ子どもたちを大切にした指導について伺った。

まずは、実態に応じて、教材の工夫や丁寧な教え方を取り入れる中で自ら学ぶ機会を作り、つまづきを最低限にして救いあげる手法について提案いただいた。1stステージにいる子どもは、「教わる・わかる授業」で力をつけられることも多いが、上記に挙げた子どもたちにとっては難しい。その為に、身近な人（親や教師）と遊びなどを通して楽しみながら経験を積み上げていき、感覚を育むことが大切である。基礎学力は、読み（見る・聞く【入力】）・書き（伝える【出力】）・計算（操作する【思考】）の学習の三要素に加えて、時間や気持ちが含まれる。その中で一人ひとりの入力・出力・思考を伸ばし、いかに豊かに生きるかを伝えることが重要となる。

一例として、算数教育で使われるブロックが挙げられた。バラバラで扱いづらいものであり、10までの数を頭でイメージしきれていない子は十分に操作ができず、指を頼る。それを置き換えるものはないかと模索する中で数を分かりやすく捉えられる「村上タイル」の活用が有効という気づきがあった。2色で表現されており、数量感覚が十分でない子にとって見える形で提示でき、触って操作しやすい為、かたまりで考えられるようになったり、補数をつかみやすくなったりしたという。また、水道方式を生かした計算の型分け（①5まで ②5といくつ ③5以上の数 ④5の両替 ⑤0の計算）を紹介された。たし算の考え方は、7+6の場合、補数型（7はあと3こで10、10と3で13）と5・2進法（5と5で10、10と3で13）があるが、タイルを用いると視覚的に考えさせることができる。子どもによって理解の差があるとともに、問題によって型の使い方が異なることも踏まえて、自身で使いやすい方を選ばせることが欠かせないという見方だった。さらに、仙台高等専門学校〔竹島研究室〕と連携してタイル式計算モンスターなどの開発をされている。学校だけで

なく、家庭での協力を仰ぎ、繰り返し行うことで子ども自ら挑戦できるようになり、自信が生まれスキルアップに繋がっているという。参加者も先生より大きな数タイル（1から10）を出すと勝ちという簡単なルールの数字後出しじゃんけんを体験し、学ぶ面白さを実感させてもらった。

休憩をはさんで、国語教育に焦点をあてたお話をいただいた。算数では「思考」で苦勞している子が多いが、国語に関しては、入力・出力・思考の中で複合的に苦勞している。その中でも決定的に支援が必要なのは、「入力」、つまり読みの苦手な子である。その支援の第一段階として、まず見えているかが問われている。眼球運動は、現代の子どもたちは経験不足であり、眼球が動かない、または動きすぎる子が多いと言う。毎日の生活の中で眼球運動を継続的に取り入れることで、改善が見られることもあるそうだ。また、視知覚も課題であり、これが発達していないと、「め」と「ぬ」などの違いが分かりにくい。そのためにも、『こぐま会』から発売されている「**ツートンパズル**」などを使う方法も紹介された。

漢字に関しては、書くことよりもとにかく読めることを優先して取り組む。宿題についても、量やマス、見本の大きさが適切かを判断する。テストについても、各出版社から出されている総ルビテストを薦めるなど合理的配慮が必要である。ルビを打ち続けることで、学力が低下することはなく、むしろ確実に読めるようになってくるそうである。

非常に魅力的なお話と熱意ある指導に、次の日から使いたいという思いをもった参加者も多数いたと思われる講座でした。

